

たものではなく、照射と共に併用したナイトロミンの使用、又はその直後の照射部位に限られている。従つて白斑の出現は、レ線照射による直接の影響の外に、ナイトロミンの作用も関与しているものと推測される。吾々はこれに関して若干の考察を試みた。

#### 文 献

- 1) 永石保, 尋常性白斑に関する研究, 皮膚性病誌, 61, 2 : 37, 1951.
- 2) 滝川浩郎, 部尋常性白斑に関する研究, 皮膚泌尿誌, 30, 10 : 1001, 1930.
- 3) 土肥章司, 植物神経系の「サルワルザン」障碍による白斑黒皮症, 皮膚泌尿誌, 30, 2 : 109, 1930.
- 4) 橋本喬, 白斑の病理及び治療, 皮膚泌尿誌, 31, 3 : 357, 1931.
- 5) 入沢保, 健康部及び白斑病巣に於ける色素発生機転の組織学的研究, 皮膚泌尿誌, 31, 1 : 1, 1931.
- 6) 高橋信吉, 渡辺照, 一種の慢性毛嚢炎に之に伴へる小白斑性皮診に就て, 皮膚泌尿誌, 48, 2 : 128, 1945.
- 7) 富永文次, 原田貞和, 黒色表皮腫に就て, 皮膚泌尿誌, 36, 1 : 65, 1934.
- 8) 太田正雄, 皮膚腫瘍, 皮膚泌尿誌, 47, 5 : 375, 1940.
- 9) 坂上虎瀧太, 全身到る処に劇烈なる転移を來たせる黒色内腫症の一例, 皮膚泌尿誌, 21, 10 : 920, 1921.
- 10) 水野勝義, メラニンの本態に関する研究, 日新医学, 40, 4 : 225, 1953.
- 11) 安田利颯, 性ホルモンの皮膚科的応用, 最新医学, 8, 7 : 77, 1953.
- 12) 富永文次, 原田貞和, 黒色表皮腫に就て, 皮膚泌尿誌, 26, 1 : 65, 1934.
- 13) 川村大郎, 黒色を呈する皮膚腫瘍の臨床と病理, 診断と治療, 41, 7 : 31, 1953.
- 14) A. J. Lea, The effect of Aminopterin on the autoxidation of Dopa, Brit. J. of Cancer, 5, 3 : 1951.
- 15) C. B. Allosopp, Radiation chemistry, Brit. J. of Radiol. 24, 5 : 284, 1951.
- 16) M. Burton, Elementary chemical process in radiobiological reaktion. Symposium on radiobiology, 1952.
- 17) G. Hevesy, Ionizing radiation and cellular metabolism. Symposium on radiobiology, 1952.
- 18) R. F. Nigrelli, M. Gorden, The Inversion and cell replantment of one pigmented neoplastic growth by a second, and more malignant type in experimental fishers, Brit. J. of Cancer, 5, 1 : 1951.

## 特 発 性 喉 頭 神 經 症 に つ い て

昭和28年8月14日受付

日赤本部諏訪病院耳鼻咽喉科

岸 澄 三

### On the Idiopathic Laryngoneurosis

Department of Otorhinopharyngolaryngeology, Suwa Hospital, Japan Red Cross Society

Sumizo Kishi

The clinical observation was made on 16 cases of idiopathic laryngoneurosis and following results were obtained.

The morbidity was three times more frequent in woman than in man and its highest rate was seen in 20-40 years of age against the usual report which says the most frequent occurrence exists in the climacteric period. The reason why so many cases were seen in spring and summer was not fully understood. The chief complaints were feeling of foreign body, dryness and itching of the throat. The rate of Ascaris eggs found in stool examination was lower. The pathogenesis of the disease is still obscure and there have been no therapies reliable, so I think that it should be studied also from the point of psychological views.

#### ま え が き

喉頭の異物感、痒感、狭窄感等を訴えるに拘らず他覚的に喉頭に何等病的所見を示さないものを喉頭神経症と称せられているが、従来舌根扁桃腺肥大により咽喉頭部に異常感を覚えるもの、喉頭蓋の遊離縁が舌

根部に接触することによつて異常感を発するもの、喉頭の軽度炎症により蟻走感、痒感を示すもの或は食道の限局性浮腫に基くもの等をも喉頭神経症に總括せられているが、これ等器質的变化を全然缺如した特発性(本態性)喉頭神経症とも称すべきものはその原因

を明瞭にし得られない為はその治療法も適切なものがなく治療上困難を感じることが多い。余の外來に於て最近特発性喉頭神経症と診断し得た16例につき些か考察を加えると共に諸賢の御教示を得べくここに報告する次第である。

## 症 例

余の外來で取扱つた患者の中、長期間観察し経過を詳細に知悉し得た代表的な2例を記載する。

### 症例 1.

25才の男、土建業、初診27年3月13日。

来院2週間前より咽喉痛があり医治を受けて疼痛は消失したがその頃より喉頭附近に痰のからむ感として不快でならない。嚥下痛は訴えない。

両鼓膜は中等度に濁濁を示し左鼓膜は後上部に、右鼓膜は前下部に石灰沈着がある。鼻腔粘膜は僅かに発赤しているが清浄である。咽頭には異常を認めない。喉頭は他覚的に認むべき所見はない。

吸入及喉頭内薬液注入をして帰宅せしめたところ其後暫らく来院せず約1ヶ月後の4月17日外來を訪れたが初診以來依然として喉頭部及気管上部に乾燥感があり常に咳払いをしたい気持が存続していると訴える。然し咽頭部には前同様所見は存在しない。

内科の検診を受けさせたが打聴診並びに「レ」線写真に於て胸部には異常がない。蛔虫卵及十二指腸虫卵は陰性である。ワ氏反応陰性。

4月17日アドレナリン検査を施行。注射前血圧112~55、脉搏56至でアドレトリン 0.7cc。注射後20分に血圧142~58、脉搏68至となつたが最高である。心悸亢進が僅かに認められ全身倦怠感があつた。

4月19日ピロカルピン検査を施行。注射前脉搏60至0.1%ピロカルピン 0.7cc。注射後20分で脉搏70至となつたが最高で、唾液量は70cc、発汗は著明に認められた。

吸入及喉頭薬液注入の他、レスタミン、テブロン等の注射を行つたが喉頭異物感は去らず、ワ氏反応は陰性であつたが職業的關係も考慮し駆梅療法も施行したが変化なく、常に咳払いをしたい気持が存在している。同年12月23日以來全治せざるまゝ来院しなくなつた。

### 症例 2.

21才の女、バス車掌、初診27年4月16日。

約1ヶ月前風邪に罹後嘔声となり喉頭部がつかつか様な気がして高声を出すことが出来ないとして来院。

耳、鼻、咽頭には異常所見はない。声帯に僅かに血管走行が著明となつている。

治療により喉頭所見は全く正常となり会話も尋常に出来る様になつたがバスに乗車勤務していると段々声が出なくなる。感応電流、テブロン、レスタミン注

射、「レ」線深部照射等を行つたが著効なく、外來診療での対話は常人と何等異るところはないに拘らず乗車勤務していると嘔声となり甚しき時は Aphonie の状態となつて勤務不能となる為に遂に退職してしまつた。

## 臨 床 的 考 察

### 1. 頻 度。

喉頭神経症は外來診察にて稀ならざるものとなされているが、16症例を得た期間の外來患者總数1376名に対し0.9%であり、その中喉頭疾患患者109名に対しては0.15%であつて発生頻度は僅かである。これは舌根扁桃及喉頭蓋形態異常を示すものは除外し他覚的には何等病的所見を含まないものみに限定した為であつて柏戸の報告の如く軽度発赤を有する者等をも加算すれば之より増加するであろう。

### 2. 性 別。

男性4名、女性12名であつて女性に多く認められる。柏戸は男女比を1:2と報告し余の場合は1:3であつて女性に圧倒的に多数に認められる。

### 3. 年 令 別。

第1表の如く21~40才に最も多く認められた。貝田は月経閉止期に最も多いと記載し柏戸等も40才台に比較的多いことよりこれを肯定しているが余の場合では更年期症状と決定することは出来ない。月経及妊娠時に喉頭異常感覚を訴えることがあると云ふが現病歴に於て月経の關係を聞漏らしたのでその点は不明である。

第 1 表

11~20才	1
21~30才	6
31~40才	4
41~50才	3
51~60才	0
61才以上	2

### 4. 季 節 別。

初発徴候を示した時期を明確にし得ないので患者の訴えにより四季に別つと春6名、夏7名、秋0、冬3名であつて春夏に多く秋冬に少い成績を得たがこれの意義づけは例数が少いので決定的な結論は得られない。

### 5. 原 因。

ヒステリー、憂鬱症、痲及梅毒の恐怖症、習慣性手淫或は肺結核の前駆症等が挙げられているが余の症例に於ては原因の明瞭なるものもなく、現病歴調査に於ても2名が風邪罹後異物感が去らずと訴えるのみで他の全てが明らかな説明を缺いている。長期間治療を続行した2名に於ても胸部所見は認めなかつた。主訴の項に見る如く蛔虫でもつまつている様な感じを訴え、蛔虫症を患者自身も疑い又医師より駆虫薬を投与された例があるが、糞便検査を行つた6名は皆陰性で、既往症を有する者は3名にすぎなかつた。後に記するが如き患者の訴え及治療経過等より心因性のものとなすが妥当であろう。

## 6. 主訴。

第2表の如く異物感を訴えるものが圧倒的多数である。柏戸の報告に於ても異物感を訴えるものが多いとせられているが異物感の者に於ても又痒痒感を訴える者も恰も喉頭附近に蛔虫がつかえている様たと表現するものが比較的多い。

## 7. 自律神経系検査

アドレナリン検査を6名に於て施行したが唯1名に交感神経緊張状態を疑わしめるものがあったのみである。ピロカルピン検査は9名に於て行い、脉搏が注射前より20至以上増加したものは1名のみであつたが唾液量は80cc.以上の者が6名であつた。副交感神経系の不安状態の傾向が推測せられる。

## 8. 血液所見。

5名に血球計算及び白血球分類を行つたが殆んど変化を認めることが出来なかつた。

## 9. 治療日数。

第3表の如く初診日だけで、何等所見のないことで安心して病的観念を消失したものが約半数あり、1週間以内の治療を行つた者が7名であつて2名は数ヶ月に亘つて治療に通つて来たことから本疾患が神経症の特徴を明示していると考えられる。

## 10. 治療法。

香宗我部は「レ」線深部治療による治験例を報告し、牧田はテブロンを推奨しているが余のところにて吸入、レスタミン、テブロン、V. B<sub>1</sub> 静注、感応電流、

「レ」線深部照射、ノイロトロピン、ドロールチン、臭刺剤内服等種々療法を加えたが適確なる治療法となすべきものを得なかつた。

## あとがき

喉頭の感覚異常を訴える者で舌扁桃肥大或は喉頭蓋形態異常等の他覚的な所見を有する者は治療対象がある為に比較的容易であるが、他覚的な所見を缺く者は体質的神経衰弱症、憂鬱症 (Hypochondrie) 及びヒステリー性素因等が大きな役割をなしこれ等精神神経症の部分症として現われたものは治療上困難を覚えざるを得ない。数ヶ月治療に通つた症例1. は土建業に従事する体格の立派な、性質の磊落な若者で全く外観上神経質性格とは全く認められない者であつて種々治療を行いつつ説得療法を併用したが結局患者自身が治療をあきらめたものであり、症例2. のパスガールは普通の会話では何等障りないに拘らずバスに乗つて勤務していると段々嗔声となり高い声が出なくなるものであつて之に対しても諸種方法を試みたが成功せず遂にパスガールを辞めるに至つたものである。その他の例は初診日又は数回の説得により安心感を得て通院しなくなつているが唯単に「大したことはないから安心せよ」位の気休めの簡単な説得に止らず精神医学的な考察及び治療を必要とするものであろう。

## 文 献

- 1) 柏戸貞一：耳喉 24, 8 : 昭27. 2) 牧田淳, 耳喉 24, 8 : 昭27. 貝田好美：耳鼻科全書9巻の1.  
4) 丸井清泰：最近神経症学各論. 5) A. Denker u. O. Kahler : Handbuch der Hals-Nasen-Ohrenheilkunde. : Bd. 5.

(本稿の大要は昭和27年11月日本耳鼻咽喉科学会東海地方会に於て報告した。)

第2表

異物感	7
虫がつまつた感じ	2
痒感	2
乾燥感	2
不快感	2
嗔声	1

第3表

1日のみの者	7
2日のみの者	3
7日以上	4
20日以上	2

## 乳児食餌としての鶏卵

The Feeding of Eggs to Infants.

G. Zabrin and R. Aresi, Minerva pediat. 4 : 571, July, 1952.

4月から7ヶ月半に亘る113名の乳児中24名の乳児に初めて鶏卵を与えた時は嘔吐、下痢及び蕁麻疹等の諸症状が見られた。嘔吐は母乳栄養児に多く見られ、蕁麻疹は人工栄養児に見られた。4ヶ月の乳児には35%に見られたが、6ヶ月半~7ヶ月半の乳児では出現率は12.5%となつた。これより見て6ヶ月以下の乳児には卵黄は与えたくないものであると考えられる。(信大小児科 小林抄)